

RIA における共同設計理念の形成過程について
 - 『建築文化』誌に寄稿された「RIA レポート」の分析を通じて -
On a formation process of design ideal of collaborating in RIA.

Through the analysis of the “RIA report” published to the magazine *KENCHIKU BUNKA*.

○松田祐也¹, 田所辰之助²

*Yuya Matsuda¹, Sinnosuke Tadokoro²

Abstract: RIA established design ideal of collaborating for the first time in Japan. The ideal is made at 1950-1960, RIA's house designing era. RIA's design system changed personal design to collaborating design at that time. We focused on this era, through the analysis of the “RIA report” published to the *KENCHIKU BUNKA* and we try to make clear the process of RIA's design ideal of collaborating.

1. はじめに

本稿では山口文象が設立した RIA(建築総合研究所)の共同設計理念について言及する。匿名性の高い通信省営繕課での土木デザインに携わった経緯や師事していたグロピウスの元で行われていた所内コンペなどに影響を受けるなど、山口は様々な自身の経験を統合する形で RIA を結成する。この RIA による 1950-1960 年代の住宅を主とした設計活動は、建築家個人による担当制から合議制へ移行した時期であり、共同設計デザインの出発点といえる。70 年代以降は住宅作品よりも都市開発の分野の比重が大きくなる。この変遷過程については西村拓真^{注1)}が都市開発分野に焦点をあてた論文で再開発法制度の変遷と RIA の業務展開、そして職能確立の観点から明らかにしている。また福間啓介^{注2)}によって RIA 結成以前の山口作品の分析、佐藤美弥^{注3)}による創宇社などの建築運動や文化活動に関する研究も報告されている。しかし RIA 結成直後の住宅作品を数多く手がけていた時期に関して調査された事例は少ない。よって本稿では RIA 結成直後の活動に注目する。組織による共同設計理念が構築される経過を再評価する事は、70 年代以降の RIA が職能象を確立し、展開していく前史として重要であると考えられる。

2. 研究目的および研究方法

現段階においては資料、文献による調査を主としている。主として『建築文化』(1956 年 10 月~1957 年 5 月)に掲載された「RIA レポート」(全 6 回)における雇員の言説や解説を典拠とし、当時の RIA における共同設計理念の形成過程を明らかにする。「RIA レポート」が掲載されている年代は共同設計に以降する過渡期であり、この時期に雇員たちが確立しようとしていた設計理念を今一度再定義し直すことを目的とする。

3. RIA レポートの分析

3-1. 戦後住宅に対する問題提起

レポートにおいて、初期段階での住宅作品は無秩序であると植田は指摘し、その原因を以下に示す。1)現代日本の住様式の乱れ、住人の住まいに対する意見の多様化。またその意見が本質的な住問題を提起し得ないものであること。2)このような住人すべてに対して建築家は啓蒙しつくすことは不可能となり、啓蒙できる仕事を選択しなくてはならなくなったこと。(仕事の不連続) 3)RIA の雇員はスター・システム(現在の建築家養成の波)によって集められたということ。4)こうして集まった雇員たちが、それでもコンフォルミズムは一応否定する態度を持とうとしたこと。こうした混乱を收拾していくメドとして平面計画を優先する方法が採用される。素朴に住様式、プランニング・パターンに注力する姿勢が見える。またグループとして共同体をつくっていく場合に理論的に解明できる方法論を確立する構造(力学とオサマリ)にも重点を置いた。

3-2. すまいの合理性

戦後の「すまいの合理性」という言葉の中には欧米の住まいのそれと直結した意味をもっており、日本が欧米の「住まい方」を一元的にあてはめている現状を近藤は指摘し、「住まい方」に自由度を求める。「住まい」の最も現実的な姿をどんな要素に抽出するかが問題になり、複雑な日本の庶民生活をプリミティブなまでの生活形態に蒸留する必要性を指摘する。欧米のモダン・リビングと日本の気候条件を上手く融合させた作品として桜井邸(1956 年)が挙げられる。グリットによる単純な平面プランで南面に対して一列に部屋を並べる手法を用いて、リビング・キッチンと子供部屋を機能的に配置した。従来日本において畳部屋に用いられて

1 : 日大理工・院(前)・建築 2 : 日大理工・教員・建築

いた並列プランと板張りによる欧米のリビング・キッチン、子供部屋との融合が見て取れる例である。

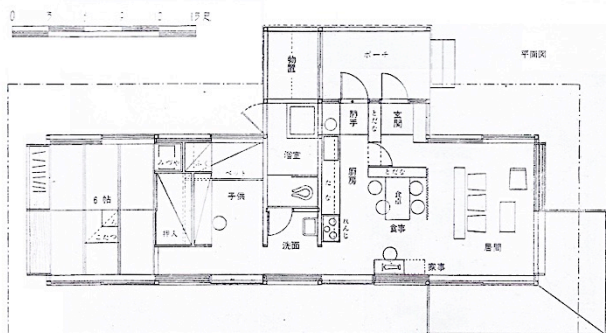


Figure.1 桜井邸平面図

3-2. RIA 共同設計理念に関して

3-2-1. 設計手法の多様化

「住宅という錯雑とした有機物を扱う過程の中で、いろいろな因子に焦点を合わせ個々の住宅設計に新しい方向づけを見出していきいたい」この池上の文言では、一般庶民住宅を扱うようになり、その手法の多様化に対応しようとする姿勢を表している。

3-2-2. 庶民生活と建築の距離感

「建築が現在ではまだ、庶民生活一般に共通したものでなく、建築主一人に属している感が、あまりにも強いのですが、わたくしたちの建築する場がここに基盤を置くのではなく、その中からでも公約数を得ようという態度が望ましいのだ」この富永による文言は建築の一般庶民への認知を広めようとする態度であり、山口のプロレタリアート救済の姿勢が見られる。

3-2-3. RIA におけるレポートの意義

「我々のレポートの目的も住宅設計を職業として成立させるためのデザインの方法、およびグループという社会の建築家同士の協力方法を追求することであった。」このレポート自体の意味合いについて言及している。また植田は担当制よりも合議制の方が優れていると安易に肯定する所員の態度に否定的で、このレポートに関しても各担当の個人差に期待していたという文言が加えられている。(コンフォルミズムを否定する姿勢を期待していた。) レポートを通しながらまさに RIA はそのあるべき姿を模索していたことがわかる。

3-2-4. グループカラーとしてのゾーンプラン

ゾーンプランは目新しいものではなく、近代住宅が目指している生活合理化や、近代建築が目指しているデザインの単純化への方向等に則っている普通の方法であるが、現実からのリアクションが複雑な過渡期の社会に対応できる上、近代主義傾向も持ちうる手法とされている。このメソッドの持つ合理性は、非個人的な

表現を取りやすく、間口の広い方法であるため共同作業には向いているとして採用された。

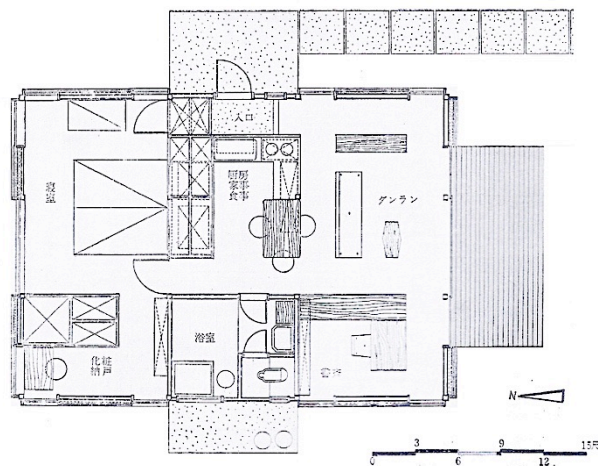


Figure.2 山口邸平面図(ゾーンプラン)

3-2-5. 共同設計における個性

設計が共同化する目的は「すぐれた作品をつくるよりも、相互の対人関係・対社会を意識した別タイプの個性をつくらうとしていた。」とし、所内の作品に対しては個人として一層批判的になるため、作家+批評家という機能を徹底させる。またコーディネーターとして、ジャーナリスト・ビルダー・エンジニアの社会連帯の上に立つ新しい建築家のタイプとなることを目標としていたことが言説によりわかった。

4. まとめ

戦後の住宅需要の増加により、住様式の多様化や、欧米のモダン・リビングの浸透など住宅を取り巻く環境は錯綜していた。そうした状況に対応すべく建築家たちはあるべき姿を模索しはじめた。その中で RIA は一般庶民への建築の浸透、そして住宅の大量供給に対応しながらもグループとしてのカラーを見出す方法として共同設計における平面計画を選択したのだと考えられる。またレポート自体にもジャーナリズム的側面だけでなく、各々の考えを雇用同士で共有し、あるべき方向を目指すための媒体としての役割があったと考えられる。そして共同化することにより社会連携上に新しいタイプとしての建築家象を確立させようとしていた事が明らかとなり、70 年以降の RIA における職能の多様化の布石となっていると考えられる。

【主要参考文献および引用図版】

植田一豊「住宅ノート：RIA レポート (55-56 年の住宅) その 1」『建築文化』1956 年 10 月号 P.58-62/近藤正一「住宅ノート：RIA レポート (55-56 年の住宅) その 2」『建築文化』1956 年 11 月号 P.21-27/池上彰一「住宅ノート：RIA レポート (55-56 年の住宅) その 3」『建築文化』1956 年 12 月号 P.43-51/富永六郎「住宅ノート：RIA レポート (55-56 年の住宅) その 4」『建築文化』1957 年 2 月号 P.57-64/植田一豊「住宅ノート：RIA レポート (55-56 年の住宅) その 5」『建築文化』1957 年 3 月号 P.53-62/三輪正弘「住宅ノート：RIA レポート (55-56 年の住宅) その 6」『建築文化』1957 年 5 月号 P.57-68/Figure.1 植田一豊「住宅ノート：RIA レポート (55-56 年の住宅) その 1」『建築文化』1956 年 10 月号 P.58-62/Figure.2 池上彰一「住宅ノート：RIA レポート (55-56 年の住宅) その 3」『建築文化』1956 年 12 月号 P.43-51 【既往研究】注 1) 西村拓真「1950-70 年代大阪における都市再開発と RIA-法制度/職能/共同体の相互規定的な転換から」(2013 年)明治大学修士論文注 2) 福岡啓介「9175『建築家山口文象に関する研究-RIA 結成以前の作品の分析を通じて-」(1998 年 9 月)日本建築学会大会学術講演梗概集 (九州) /注 3) 佐藤美弥「都市社会における文化活動の研究-両大戦間期の創宇社建築会を中心に-」一橋大学博士論文